

本校の取り組みがベネッセコーポレーションの 研究会で紹介されました

平成30年3月27日（火）のベネッセコーポレーション主催「専門高校の強みを活かした資質・能力の育成を考える会」（大阪）において、本校の2017年度1学年の取り組みが先進校事例として紹介されました。大阪・兵庫・奈良・和歌山・滋賀からお集まりいただいた先生方を対象に、ベネッセコーポレーションの松原氏より、本校の基礎学力向上の取り組みや進路探究学習の取り組みについて紹介がされました。研究会後のアンケートについても好評の声が多々あったということです。

今後もベネッセコーポレーション主催の各種研究会において、本校の取り組みが紹介されるとのことなので、引き続き、教員一同指導に邁進したいと考えております。



1 茨城県立 常陸大宮高等学校 「過去」を振り返り、「未来」を考え、「今」の行動につなげる進路探究学習と学力向上施策	2 茨城県立 常陸大宮高等学校 「過去」を振り返り、「未来」を考え、「今」の行動につなげる進路探究学習と学力向上施策
学校情報 ■公立、共学（普通科、機械科、情報技術科、商業科） ■1学年約80～100名 ■進路実績(2017)：4年制大学6名、短期大学4名、専門学校20名、就職58名	成果 ①学力の向上 ベネッセ基礎力診断テストにおいて、 国数英GTZ Cゾーン以上の人数が回を追うごとに増加（4月：13人⇒9月：14人⇒1月：17人）。 国数英GTZ D3の人数が回を追うごとに減少（4月：55人⇒9月：52人⇒1月：46人） 義務教育範囲の得点率においても、大幅な成績向上が見られる。 ②進路意識の向上 進路について考えるきっかけを増やしたことで、生徒の進路観が多様化。1学年の年度末に行った希望進路調査では、従来の「就職6割強、進学4割弱」という傾向から、「就職4割強、進学6割強」に進学に対して興味を示す生徒が増加し、就職一辺倒ではない進路の選択と比較・吟味したうえで自分の将来を考える生徒が増えた。
取り組み ①「未来づくりプログラム（サイ発見）」で基礎学力の習得を行う 学校設定科目として、「未来づくりプログラム（サイ発見）」を設定。週に2コマの時間を使い、国語と数学の学びなおし学習を実施。教材の一つとして、マナレを導入。 ②「未来づくりプログラム（シン発見）」で進路探究を行い、進路意識を醸成する 「道徳」・LHRの時間を2年生から行われる「シン発見」の準備講座として、進路探究に関する年間指導計画を作成。卒業後の進路を考えさせる指導体系の下、進路指導を行う。<u>入学初期のタイミングで「あこがれ」し（過去の自分が憧れていた職業の振り返り）「4つの進路（大学・短大・専門・就職）」に関する講話・ワーク等を行い、就職一辺倒にならない進路指導のスタートを切っている。</u> ③外部講師・外部試験の活用 「サイ発見」「シン発見」の計画に合わせて、最適なタイミングで外部講師による進路・学習講演会や外部テストを実施。年間計画にテスト実施日や講演日をあらかじめ記載しておくことで、<u>日々の活動をやりっぱなしにせず、振り返りの機会がいつなのかも明らかにしようとしてP D C Aに即した指導体制を整えている。</u>生徒向けの進路講演会であるが、保護者にも案内を送付し、希望する保護者は参加できるようにしている。講演会の中では、成績向上者の表彰式や学習の振り返り、進路活動の振り返りワークをさせており、<u>生徒が主体的に参加できるような講演プログラム</u>にしている。	今後に向けて ①「2人担任制」の役割を明確化し、それぞれにコミットする内容を明確化 現在の2人担任制の枠組みを「LA:ライフアドバイザー（生活指導領域）」「CA:キャリアアドバイザー（学習・進路指導領域）」という形に変更し、それぞれの担任の役割を明確化。ライフアドバイザーは基礎力診断テストの「生活習慣」の改善にコミット、キャリアアドバイザーは「学習時間」「GTZ」にコミットするよう形で、指導の大きな方向や大まかな目標を設定し、校内指導のP D C Aの質を高め、生徒の高校生活をより充実したものになるように計画。（2人担任制を単なる「担任業務の按分」にしない） ②「キャリア教育」「修学旅行の事前学習」で探究活動を実施 2学年の「シン発見」進路探究基礎では、「キャリア教育」「修学旅行」を2本柱にして計画を立案。前者は、インターンシップ準備～インターンシップ～進路検討～希望進路の決定までを行う。後者は修学旅行の事前学習として、訪問予定のテーマパークのそれぞれのアトラクションの魅力をチームごとに調査・分析・プレゼンさせる。校内に複数の系列があり、系列ごとの連携を取りづらいうえに、この発表を通して「普通科の思考の深さ」や「商業科のプレゼン技術」など、それぞれの系列の生徒が日頃の学習において身につけた強みを披露できる場を作り、<u>生徒・教員それぞれにおいて系列間の理解促進につなげる狙いがある。</u>